まえがき

信州大学環境問題研究教育懇談会が母体をなす昨年度（昭和53年度）の特定研究以来，多様性に富む信州の自然，社会の中にひそむ多くの問題点が摘出され，解析が進められて来た。そして，各々の方法論に立脚した各研究が，一つの求心的ベクトルを帯びつつも，有機的な連携と言う点では必らずしも十分ではないという反省がなされた。有機的な結合による真の総合性の実現は実は口で言う程簡単ではない。しかし，それへむけて一つづつ次元を高めてゆくことは，表記のテーマへ効率よく接近するための前提であって，そのためには，不断の努力以外に道のないことが再確認された。

昨年に引き続き更に向う３ヶ年の特定研究が計画されたのも，このような会員一同の熱意によるものであった。幸にして，関係各位のご理解をいただき，３年継続の特定研究が採択されて，ここに再度新しい出発をむかえた訳である。

研究の進め方としては昨年度の場合と同様，“総合”を視野に入れながら，それぞれの場で，各様の方法論でモニタリングが行なわれ，解析が進められた。すなわち，長野県の貴重植物に対する貴重度の再評価が行なわれると共に，山地保全や物質生産を大きく特徴づける葉量分布の推定が昨年度に引き続き行なわれた。更に，地質学的アプローチを始めとして中信高原の自然に対する多角的なモニタリングが行なわれると共に，観光開発をめぐる諸問題が社会科学的側面からとりあげられ，問題解決への具体的提案がなされた。また，諏訪湖の富栄養化にともなう漁獲量の推移や化学分析の手段をもたない人達にも水質の赤信号を送る指標生物，更には水中重金属に対する植物の反応等の問題もとりあげられた。また，環境総合評価の有効な手段ともなる鳥類の群集構造にもメスが入れられた。コメントとしては，諏訪湖浄化対策の一基本をなす湖流の三次元解析への試みや，人為圧によって姿を消してゆくイワナの話題や，自然教育に関する考え方，更には高等植物の過去から現在に至る分布の記録，収集，保存は新しい自然理解への前提であるとして，信州大学に自然環境総合研究センターを設立すべしとの意見も寄せられた。

会員メンバーは今も問題解明に余念がなく，したがって，この報告書も未完のままの経過報告ではあるが，年度末に際し一応のまとめを行なったものである。これが，真の学際的研究活動への一粒の芥種ともなれば幸である。

信州大学環境問題研究教育懇談会
研究代表者　松　田　松　二